気づかなかったこと

金屋中・1　磯江　真宙

「初めて」父と懇談会に行くことになった。どうして初めてかというと、僕が小学校一年生のときから父が車いすを使用するようになり、授業参観や懇談会などの学校行事には、ほとんど母が来てくれていたからだ。中学生になって初めての懇談会も母と行く予定だったが、仕事の都合で一緒に行くことができなくなってしまった。そのため、別の日に懇談会を変更してもらおうか、とも考えていた。ところが、

「真宙と一緒なら行けるかな。」

と父が言った。それを聞いた僕は、中学生になって初めての懇談会、そして父と二人で初めて学校に行くという、この二つでとても緊張した。

父と行くことが決まった後、担任の先生に二つお願いをした。一つ目は、一階の教室で懇談会ができるかどうか。二つ目は、玄関近くの駐車場に車を停めることができるかどうかだ。後日、この二つのお願いが可能となり、懇談会の日を待つのみになった。

当日、僕はやはり緊張していた。普段どこかに出かけるときは、いつも母がいてくれて、何かうまくいかないことがあると助けてくれた。以前、父が乗った車いすを押したとき、スピードを出しすぎてしまい、父を困らせたことがあった。また同じことをしてしまわないだろうか、転ばせてしまうのではないか、そんな不安が頭の中をよぎった。しかし、父は普段通り車いすを後部座席に乗せて家を出発した。学校に着くと、玄関近くの駐車場へ車を停めた。僕は父のために車いすを車から降ろし、父が車いすに座れるように準備をした。僕は、父が車いすに座ったのを確認すると、玄関のスロープに向かって車いすを押した。スロープはいつもの僕の力でも楽に登ることができた。玄関に着くと、学年主任の先生が出迎えてくれた。僕は、生徒玄関から父の車いすを押しながら校舎の中に入ろうとした。しかし、なかなか車いすは進まない。下を見ると木でできた板があった。板を乗り越えるために、僕は車いすのハンドグリップをグッと力強く下に押した。そのため、車いすが大きく後ろに傾き、父をとても驚かせてしまった。「どうしよう」と焦っていると、そこへ学年主任の先生が来て、僕の代わりに木の板を乗り越えさせてくれた。その後、学年主任の先生は父を気遣いながら車いすを押してくれた。

一つ目の段差を越えた後、僕はふと厚めの段差があることに気づき、今度は慎重に、力を調節しながら二つ目の段差を越えることができた。懇談会を行う教室へ向かう途中、三年生の下駄箱付近に段差解消プレートがあることに気がついた。僕は、

「校内に段差解消プレートがあるんだ。」

とつぶやいた。僕は入学して三か月も学校に通っているにも関わらず、段差解消プレートがあるとは思いもしなかった。

懇談会が終わって帰ろうとしたとき、先生が車いすを押すのを手伝ってくれた。父は先生と一緒に、さっき気が付いた段差解消プレートのある場所から降り、僕が使っている一年生の玄関のほうに来た。僕は靴を父の近くに持って行き、履いてもらえるように渡した。そして、車まで着くと、父の車いすを後部座席に乗せて家に帰った。帰宅後、父から

「今日は助かったよ。ありがとう。」

とお礼を言われた。この言葉を聞いて、無事に学校に行くことができてほっとした。そして、いつもは母に頼っていた部分もあったが、自分一人だけでも父と一緒に出かけることができという自信につながった。

父と初めて懇談会に行って、三つ分かったことがある。一つ目は、

段差のことについてだ。たまに父と一緒に行く買い物では、多少の段差をあまり気にすることなく素通りしていた。しかし、毎日通っている学校は、車いすで学校に入るためには、段差を二つ越えなくてはならなかった。改めて、一見ちょっとした段差でも、車いすを使用する父が移動する際の負担になっていることが分かった。二つ目は、スロープのことについてだ。自分の中学校は、スロープがついているので、車いすでの生活も難なくできると思っていた。ところが、今回のことでスロープが設置されていても、安心することはできないと思った。なぜなら、スロープのほんの少しの傾斜でも、車いすに乗っている人や押す人には、強い力が必要になるからだ。三つ目は、困ったときにすぐに助けてくれる人がいることの大切さについてだ。懇談会の日、段差で車いすを動かすことに困っていたとき、先生がすぐに助けてくれた。自分一人では難しかったため、助けてもらえたことがとてもありがたかった。こういう人が、もっと自分の周りに増えたらいいなと感じた。そのためには、困っているときに助けてくれる人を大切にすると同時に、自分も周りに困っている人がいたら、すぐに手助けできる人になりたいと思った。

僕が小学六年生のころ、家族とある大型家電量販店に行ったときに困ったことがあった。父は車いすに乗っていたため、エレベーターを探した。ところが、そのお店にはエスカレーターはあるが、エレベーターが見当たらなかった。父が車いすに乗ったまま二階に行くために、エレベーターの場所を店員さんに尋ねた。しかし、そこには一般客用のエレベーターはなく、僕たちは業務用のエレベーターに案内された。エレベーターは店のバックヤードにあった。通路は狭いため、車いすで通るために、店員さんが通りにある荷物をどけてくれた。このとき、店員さんはわざわざ仕事を止めてまで、僕たちを二階まで送ってくれた。とてもありがたい気持ちになったと同時に、仕事を止めてしまって申し訳なく思った。母は店員さんに、何度も「すみません。」と謝っていた。それ以来、父と買い物に行くときは、少し遠くても店内にエレベーターが設置されている店舗に行くようになった。

一方で、最近のショッピングモールは段差がほとんどなく、通路も広いため、車いすを使用する人は買い物をしやすいのではないかと感じた。すると、建物の入り口にバリアフリー建築物であることを認めたシンボルマークを見つけた。調べてみると、二〇〇六年に高齢者、障がい者等の移動などの円滑化の促進に関する法律である「バリアフリー新法」が施行されたことがわかった。他にも、ユニバーサルデザインの考え方が採用され、立体駐車場には大型の誘導サインや、リモコンで開くゲートもある。近々市内にオープンする大型ショッピングモールにも、恐らくバリアフリー新法が適用され、車いすを使用する人でも気兼ねなく買い物ができるようになると思う。家族とそんな話をする中で、

「困ったときに店員さんなどに知らせることができるシステムがあれば、もっと利用しやすくなるんじゃないかな。」

と父が言った。父のこの言葉を聞き、今まで車いす生活をしてきた中で、きっと大変な思いをしたことがあったのではないかと感じた。利用するお店をエレベーターの有無で判断しなければならないこと。エスカレーターしかない場合、「エレベーターを使いたい」と申し訳ない気持ちで店員さんにお願いしないといけないこと。一人で出かけたときに、周りの人に助けを求めにくいこと。父をはじめ、多くの人が車いすを使用する中で、車いすを使用している人、その家族や友達が、このような思いをすることなく、もっと自由に外出することができる社会になってほしい。そして、みんなで気持ちよく、安心して暮らせる日が一日でも早く実現したらいいなと思う。そんな未来を思い描くと、明るい気持ちになった。